

IPM実践指標(施設いちご)

管理項目	管理ポイント	点数	チェック欄			
			昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況	
病害虫・雑草の発生しにくい環境の整備	防除計画の作成	栽培開始前に、病害虫防除所、農林事務所等と連携し、年間の具体的な病害虫防除計画を作成する。	1			
	健全な親株確保～採苗	親株は、定期的に更新し、病害虫の感染・寄生のないものを使用する。特に炭疽病、萎黄病等が発病した育苗施設の苗は親株として使用しない。	1			
	育苗時の病害虫対策	炭疽病、疫病対策のため、全育苗期間(親株床～育苗床)を通じて、雨よけ栽培と底面給水や点滴灌水を行い、頭上灌水は実施しない。	1			
		育苗中は、灌水が過度にならないよう留意するとともに、ポットの間隔を開けるなどして、多湿とにならないようにする。	1			
		育苗に用いる培土や資材は、病害虫に汚染されていない清潔なものを使用する。	1			
		ハダニ類やうどんこ病等を本ぼに持ち込まないようにするため、育苗期の薬剤防除を徹底する。また、高濃度炭酸ガス処理を行い、ハダニ類を防除する。	1			
	適正な作業手順	土壌病害侵入防止のため、耕起を行う際には、病害発生がない、あるいは発生程度の低いほ場から順に行うとともに、ほ場を移動する際には充分ロータリを洗浄する。	1			
	土壌消毒	前作における土壌病害や線虫の発生程度に応じ、太陽熱消毒等により適切な土壌消毒を行う。	1			
	雑草防除	雑草を発生源とする害虫の発生を飛び込みを抑制するため、ほ場内外の雑草防除に努める。	1			
	排水対策	ほ場の排水対策に留意し、水はけを良好に保つ。	1			
	適正な灌水と適切な換気	施設内が高湿・多湿にならないように、適正な灌水と換気を行う。	1			
	物理的資材の使用	防虫ネットを設置し、アブラムシ類やチョウ目等の害虫の施設内への侵入を防ぐ。	1			
		黄色蛍光灯等を点灯し、ハスモンヨトウ、オオタバコガ等の成虫の飛来・産卵を防止する。	1			
病害虫発生予察情報等の確認	病害虫防除所が発表する発生予察情報を入手し、病害虫の発生予測を確認する。	1				

防除要 否の判 断	施設内の病 害虫発生状 況の把握	施設内を見回り、うどんこ病、灰色かび病の発生状況を把握する。	1			
		粘着シート等を利用してアザミウマ類、アブラムシ類の侵入状況を把握する。	1			
		ハダニ、アブラムシ類等の発生状況を定期的に観察する。	1			
		トラップ等を利用してナメクジ類の発生状況を確認する。	1			
生 物 農 薬 の 利 用	ハダニ類防 除	ハダニ類対策にカブリダニ剤(スパイカルEX、スパイテックス等)を使用する。	1			
	アブラムシ 類防除	アブラムシ対策に天敵(アフィパール等)を使用する。	1			
	コナジラミ類 防除	コナジラミ類対策に微生物農薬(ボタニガード、バータレック等)を使用する。	1			
	うどんこ病、 灰色かび病 防除	うどんこ病、灰色かび病対策に生物農薬(ボトキラー、エコショット等)を使用する。	1			
	アブラムシ 類への粒剤 施用	定植時に粒剤を施用し、アブラムシ類の発生を抑制する。	1			
化 学 的 防 除 等	うどんこ病の 発生防止	うどんこ病に弱い品種では、専用の電気加熱式くん煙器を利用し、発生前から定期的に硫黄くん煙を行う。	1			
	天敵等への 影響回避	気門封鎖剤(粘着くん、オレート、アカリタッチ等)や、天敵昆虫・ミツバチ等に影響の少ない薬剤を選択する。	1			
	効果的な農 薬使用	薬剤散布にあたっては、下葉かき作業後に行うなど、病害虫の発生部位に薬剤が十分かかるようにする。	1			
	ローテーショ ン散布	同一系統薬剤の連続使用を避け、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行うとともに、薬剤抵抗性の発達が確認されている農薬は使用しない。	1			
	飛散防止	薬剤散布の際は、防除時に施設を一時的に閉め、飛散し難い剤型や散布ノズルを使用するなど適切な飛散止措置を講じる。	1			
そ 他	ほ場衛生管 理	発病株や罹病部位は、発見次第、早期に除去してほ場外に出し、堆肥化するなどして適切に処分する。	1			
	収穫後残さ の処理	栽培終了後の残渣は病害虫の発生源となるため、施設の密閉蒸し込みを実施し、適切に処分する。	1			
	作業日誌	病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等の栽培管理状況を作業日誌として記録する。	1			
	研修会等へ の参加	県や農業協同組合が開催するIPM研修会等に参加する。	1			
			合計点 数			
			対象IP M計			
			評価結 果			